

⑥ 私の戦中、そして戦後

松本 純子 83歳

父が出征したので、当時大阪にいたが父のふるさとである熊本に母と疎開した。熊本も大阪同様、毎日のように敵機が来てその度に防空壕に飛び込んだ。防空壕といっても洞穴で四帖半くらいの広さの中に畳が二枚敷いてあった。大人の頭がつきそうな天井からはポタポタと水が落ち、足元はグショグショ。その上太いみみずがいたのが恐かったのを覚えている。私は防空頭巾をかぶり無言で母の手を握っていた。どれほど潜んでいたかわからないが、誰かが「もう飛行機の音もしないので出てもよいだろう」との声に穴をでてお日様を見たとき、ホッとしたのを覚えている。

そんな中、戦争も終わったのと同時に父も亡くなった。村で合同慰霊が行われ、幾組かの家族の輪があり、線香のけむりがもうもうとしている中、あちこちで泣き声や名前を連呼している人もあり、私には異様にうつった。母の悲壮な泣き方に私も泣かねばならないと母の膝の上でおいおい泣いたのを思い出す。しばらくして京都のおばあちゃんを頼って帰ってきた。父のおばあちゃんは私に残って欲しかったのに私はいくら可愛がってもらっても「お母ちゃんと京都に行く」と別れの時、バスの後部座席で手を振って泣きながら転げるようにして追いかけてきたおばあちゃんをみて、京都に行ける方が嬉しくてあまり悲しくなかった。今思い出すと申し訳ない孫だった。

京都駅に着くと、構内にはたくさんの人であふれ、孤児になった幼い姿が多く見られた。ボロボロの服や靴、顔も汚れ男の子か女の子かわからない子もいた。ベンチで座っていると、頭の上から黒く汚れた手が無言でにゅーとのびてきた。母は少ししかない何かを手渡していた。「あの子達はお父さんもお母さんも戦争で亡くなった可哀想な子やで」と教えてくれた。当時、雨露のしのげる京都駅は、その子達や大人の浮浪者がいっぱいだったらしい。

戦争は終わったが、それからの母の苦労は大変だった。私を育てるために昼夜を問わず内職をしていた。いつ目が覚めても母は裸電球の下で内職をしていた。母はいつ寝るんだろうといつも思った。私を食べさせるために必死で頑張った母。主人のお父さんも戦死で、お姑さんも同様の苦労をして主人を育てた。

戦後80年。今年も全国戦没者慰霊祭（追悼式）が挙行され、戦没者310万人のために、戦争のない平和を誓って下さった。この今の世の幸せは310万人の方々と、そして多くの母親達の頑張りもあると思う。今は姑も母も逝ってしまったが、主人のお父さんも私の父も、どれだけ主人や私達に会いたかったか。無念の思いで遠くパプアニューギニアやパラオの異国で散り、残った姑、母の苦労、みんなを不幸にした戦争は絶対にしてはいけないと深く思った。多くの孤児の皆さんの事、ふと思い出した。どれだけつらかったか、今は幸せになられたか。戦争は絶対反対です。